

九州最古の近世城郭

中津城を知る



発行／中津市教育委員会

お問合せ先

中津市歴史民俗資料館

〒871-0055 大分県中津市1385 (殿町)
TEL/FAX 0979-23-8615

● 中津城の歴史

中津城は福岡県と県境を形成する山国川の支流中津川の河口沿いに位置します。北は海、西は川に面した要衝の地であり、堀の水かさは潮の干満で上下します。東は二重、南は三重の堀を有し、外堀には「おかこい山」と呼ばれる土塁をめぐるせていました。

1587（天正15）年、豊臣秀吉は九州をその支配下にいれ、豊前下毛郡など六郡の領主として、自らの軍奉行であった黒田孝高（如水）を入国させました。黒田氏ははじめ、大塚山の砦を修築し根拠地としていましたが、1588年、中津江太郎の居城であった丸山城を修補し中津城の築城にとりかかりました。「黒田如水縄張図」と伝えられる絵図には、本丸、二の丸、三の丸とともに「京町」「博多町」「町」「侍屋敷町家」「寺モアリ」と記されています。

1600（慶長5）年、黒田氏にかわり入城した細川忠興は、中津城に忠利をいれました。忠利は1603年から1620年まで中津城の増改築を行いました。1615（元和元）年「一国一城令」により、豊前国では小倉城以外の城は破却の危機に瀕しましたが、忠興が老中土井利勝らへ働きかけたことにより、例外的に中津城は残ることができたのです。1620年、忠興は隠居して三斎と号し、中津城に入ります。三斎の隠居城として修復、完成をみた中津城には、本丸、二の丸、三の丸と八門、二十二の櫓が設けられ現在の形がほぼ整いました。

1632（寛永9）年、細川氏の熊本転封によって、中津には譜代大名小笠原長次が入部し、城下町の整備を行いました。1717（享保2）年、譜代大名奥平昌成が中津に入り、以後1871（明治4）年の廃城まで、中津藩主の居城として存続しました。



「黒田如水縄張図」中津市歴史民俗資料館蔵



● 中津城築城の歴史

- 1576（天正 4）織田信長が安土城築城。
- 1582（天正10）本能寺の変。
- 1583（天正11）秀吉が大坂城築城。
- 1587（天正15）秀吉の九州平定に伴い黒田孝高（如水）が豊前六郡12万3000石の領主として入国。
- 1588（天正16）黒田孝高が中津城の造営を始める。
- 1590（天正18）秀吉が全国統一。
- 1591（天正19）肥前名護屋城築城。
- 1600（慶長 5）関ヶ原の戦い。細川忠興豊前一円及び速見、国東二郡39万9000石の領主として入国。
- 1602（慶長 7）小倉城の造営を始める。忠興小倉城に移る。
- 1603（慶長 8）家康が征夷大將軍となる。細川忠興が中津城改修開始。1620（元和6）年までかかる。
- 1607（慶長12）西門を含む三の丸が完成。
- 1615（元和元）豊臣氏滅亡。一国一城令。
- 1620（元和 6）忠興が隠居。家督を忠利に譲り、忠興は中津城へ入る。細川時代の中津城整備完成。
- 1632（寛永 9）小笠原長次が中津6万石の城主として入国。
- 1652（承応元）このころ中津城下の整備がほぼ終わる。
- 1683（天和 3）城門、櫓の普請を行う。
- 1717（享保 2）奥平昌成が中津10万石の領主として入国。
- 1863（文久 3）城内に「松の御殿」を築く。
- 1871（明治 4）廃藩置県により中津城廃城。

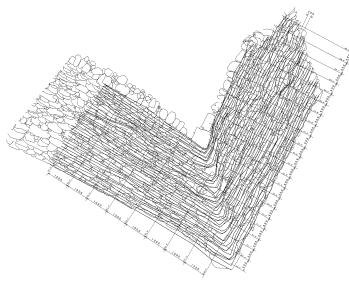
● 中津城の特徴

中津市では、2000年より本丸と三の丸の間の堀を掘り上げ水を流し、傷んだ石垣を修復する整備工事を行ってきました。半分ほど埋まっていた石垣を根石まで掘り下げたところ、築城当初の石垣が広範囲に現存することがわかりました。小さく乱雑に見えた石積みは、自然石の特徴を生かして積む、石垣建築では最も高度な安土桃山時代の技法で積まれていました。中津城は、秀吉の命で九州に入った武将達が築いた「九州最古の近世城郭」の一つです。同じ年に造られた他の城は壊れてしまったことから、当時の石垣が良好に残存する九州唯一の城となりました。このように貴重な中津城石垣の文化財的価値が工事によって落ちてしまうことのないよう、昔の石積みの技術を現代に復元することを目指して、工事は慎重に進められました。

石垣復元の行程



① 解体範囲を決めたら石に番号をふり、1mメッシュユで糸を張り、撮影します。



② 解体前に石垣の図面をとり、傾き等を調べ、復元のための資料を作ります。



③ 解体中は1石ずつ計測し、裏込めの様子や石の積み方を観察します。



⑤ 丁張を張り、足場を組みます。



④ 解体した石は、番号順に並べます。



⑥ 写真や図面を参考に元通り積んでいきます。傷んだ石は交換します。長い年月くずれない様、何度も何度も積みなおします。



⑦ 完成しました。出角や入角(90°に折れている部分)は、左右両方の石がかみあう必要があるため、とても困難です。



⑧ 石垣の上に立って天端のラインを見通すと、内側にゆるやかにカーブを描いているのがわかります。「輪どり」といって、石垣がくずれにくくするための技術です。復元は、わずかなカーブや傾斜にも気を配って行います。

江戸時代のおもかげ

中津城下町

中津城下町の祖形ができたのは細川の時代で、14町が形成されたといわれてきました。しかし、近年の調査で、黒田時代にある程度の町割りがなされ、細川以降の町割りには、その区画を踏襲したものであることがわかりました。

城下町は小笠原期に整備・拡張され、奥平期へとひきつがれました。また細川氏が城内にひいた水道（御水道）は、小笠原期には城下町へと拡張されました。

城下町は軍事的な防備を考えてつくられています。中津では、城の玄関口である大手門前に商人の町（京町・姫路町・片端町など）、下級武士の組屋敷は城の東南の外郭内（鷹匠町・中間町・留守居町など）、北西の郭外（角木町・浦町など）、西南の郭外（古金谷・森ノ丁など）におかれ城下町の守備を固めました。

また外郭沿いには神社・仏閣が配され（寺町など）、いざ戦闘のときには広い境内、大きな建物を利用できるようにしました。

中堀・外堀沿いにはおかい山とよばれる土塁をめぐらせ、城下町を守っていました。

今でも当時の地名がそのまま使用されており、直線的な城下町の町割りに、江戸時代のおもかげをたどることができます。



- 高級武家屋敷
- 組屋敷
- 町屋
- 神社
- 寺

① おかい山
 (大分県指定史跡・江戸時代初期か)
 城下町の西南角に残る城下町を守る土塁の一部。
 高さ5.3mで残りがよい。自性寺境内にある。



⑥ 川沿いの黒田時代の石垣には神石が多量に使用されている。



④ 水門跡。石割時の矢穴が多数。



③ 西門跡。かつて石に「慶長12年9月」の文字が刻まれていたという。



② 江戸時代のままの細い道が入り組む金谷武家屋敷跡。



「中津城下絵図」(市指定有形文化財)
 幕末の城下町の様子が詳しく描かれています。

8 細川の石垣 黒田の石垣



四角く加工された
神籠石の石垣



5

本丸北側には、石垣にy字状に目地が通る場所があります。向かって右側の石垣が黒田時代の石垣で、その上に積み重ねられている左側の石垣が細川時代といわれています。細川時代の石垣は丸みを帯びた自然石で、黒田時代の石垣は四角く加工された石が多く使われています。これは、「黒田時代は未加工の自然石」という基本に矛盾します。実は、川上（福岡県上毛町）にある7世紀の神籠石列石の遺跡（唐原神籠石）から四角く加工した神籠石を持ち出し石垣として使用したもので、川沿いに多く用いられています。直方体の一辺がけずられ、溝状になっているのが特徴です。



9 武家屋敷跡を復元。



10 福澤諭吉が幼少時代をすごした旧邸。
(国指定史跡・江戸後期)



7 奥平の宝物を納める
模擬天守。

11 おかこい山（鷹匠町・市指定史跡）
H23年4月より公開。



12 大江医家史料館
(市指定有形文化財・江戸後期)
中津藩御典医の大江家。



13 城下町東側の守りを固める寺町。



14 大手門に続く石垣。
(黒田期以降増築)



16 薬医門（江戸時代後期）
中津藩御典医中村家の屋敷門。
内部は中津市木村記念美術館。



18 村上医家史料館
(市指定史跡・江戸後期)



17 中津市歴史民俗資料館
中津城出土遺物を展示。



15 南部小学校正門に移築した
家老「生田家」の門。
(市指定史跡・江戸後期)



黒田時代、石垣の幅は狭く、高さも低いものでした。石垣を解体すると、古い時代の石垣や排水溝などが発見されます。左の写真は石垣内から出土した黒田時代の礎石建物跡です。黒田時代は石垣を低くして建物を建て、細川時代は石垣を高く幅広くつくりかえ、石垣の上に櫓を建てていたことがわかりました。



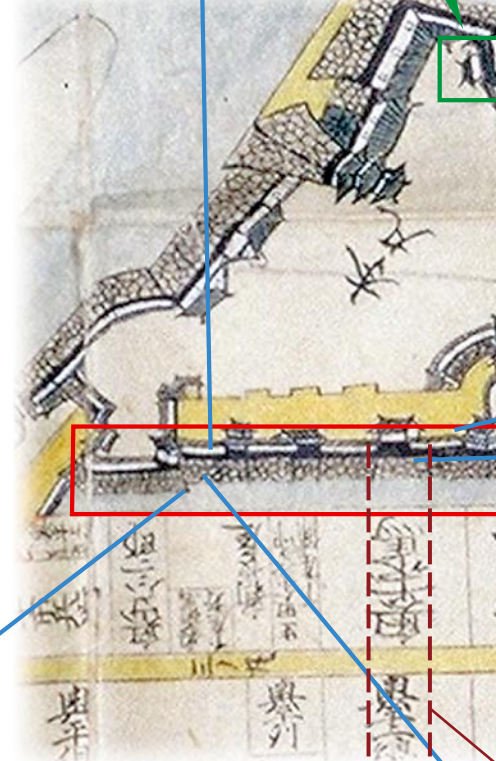
本丸入り口に



石垣の下には胴木と呼ばれる木を敷いて石垣を支えていました。出角部では太い松の木が差し込まれていました。



堀底から出土した黒田時代の丸瓦(上)と、細川家紋入りの鬼瓦(下)。



現在の模擬天守の位置

解体修復工事をした石垣



張り出している角を出角といいます。角石は、石の長軸を交互にふる「算木積み」という積み方です。黒田時代の石垣の特徴が最もよくあらわれています。



石垣は「反り」がなく直線的ですが、両端より中央の方がより傾斜します。力を内側に集中させ、倒れにくくするためです。

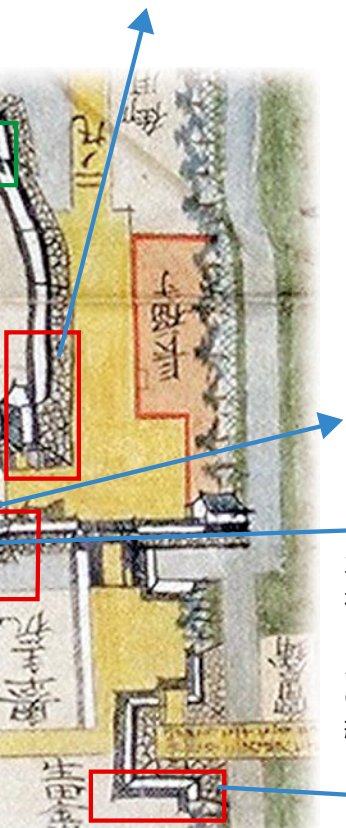


本丸の南側の境はりました。

津城発掘



には大きく薄い石を使用。



明治4年、石垣を壊して作られた道路



掘り上げ、昔のように水を



中津城が作られる前(15~16世紀)には、中世城館がありました。高い石垣を積む近世の城とは異なり、溝の壁面に石をはりつけていた様子がわかります。



本丸の南東隅には黒田時代の大型礎石建物がありました。最大径1.6m、厚さ70cmの大きな礎石と、中央に丸い穴のあいた石が出土しました。穴の周囲には墨書で梵字が書かれていました。黒田が城を築いた安土桃山時代、本丸の中に寺院が建っていたと考えられます。

石垣は現在、高さ7m、幅4mですが、築城当初は高さ5.8mと低く、幅も今より狭いものでした。大鳥居西側の石垣断面には古い石垣が顔をのぞかせています。堀側の石垣は昔のままですが、何段階も経て、城内側へ石が継ぎ足されていった様子がわかります。



本丸南側の石垣は、明治時代に石垣の一部を壊し道路が通ったため、東西に分かれました。石垣の端から反対側を見ると、道路を挟んで緩やかにカーブを描いているのがわかります。これを「輪どり」といいます。石垣を壊れにくくする工夫です。



大手門へとつながる南部小学校の石垣には、威容を示すための大きな石が利用されていますが、厚さはわずか20cmほどです。

中津城出土遺物



桐文丸瓦、桐文鬼瓦

秀吉の家紋である桐の葉を形どった瓦です。桐の葉を用いることは秀吉の許可が必要であったと考えられています。秀吉子飼いの武将の城に使用されました。



鬼瓦

棟先を飾りました。鳥(3)やシャチホコ(5)などの動物、丸に引き両紋(4、細川家の替え紋)など家紋を表したものが出土しました。



金箔瓦

金箔瓦の使用は秀吉が許可した大名のみに許され、豊臣政権の威信を示す役割も担っていました。九州では佐賀県の名護屋城などから出土しています。大分県では城郭から出土したのは初めてです。



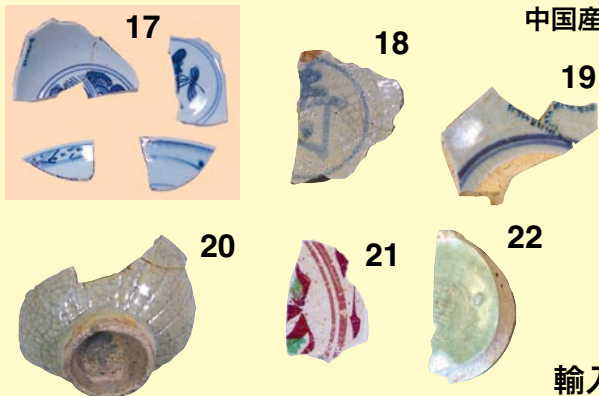
各種瓦

中津城では多くの種類の瓦が出土しています。名護屋城や小倉城と同じ模様の瓦も出土しました。特に同じ版木で作られた瓦を同范瓦といいます。



国内産陶磁器

唐津産溝縁皿(11) 唐津産皮鯨手皿(12) 伊万里産磁器椀(13) 波佐見産青磁皿(14) 瀬戸・美濃産天目茶碗(15) 瀬戸・美濃産陶器壺(16) などが出土しています。中津城に全国から多くの品々もたらされたことがわかります。



中国産



朝鮮産

輸入陶磁器

中国景德镇窯系青花椀(17) 中国漳州窯系青花椀(18,19) 中国漳州窯系白磁椀(20) 中国産五彩椀(21) 中国竜泉窯系青磁椀(22) 朝鮮産陶器椀(23,24) 朝鮮産白磁椀(25) 朝鮮産白磁皿(26,27) 朝鮮産白磁鉢(28) などが出土しています。これらの焼き物は、大陸からもたらされた当時の貴重品でした。